黒毛和種の子牛2割高

相次ぐ離農に供給減懸念

6月

肉用子牛の価格が高騰している。主力の黒毛和種は6月の平均価格が前年同月と比べて2割の高値だった。和牛の枝肉は現在は需要の低迷を反映して軟調な価格が続くが、子牛の相場上昇により再び高くなる可能性がある。

牛肉相場に影響見通し

独立行政法人の農畜産業振興機構（東京・港）によると6月の黒毛和種の子牛価格（全市場の平均）は、前年同月比22％高の64万円だった。2024年は50万円台前半～半ばで推移することが多かったが、25年は直近4カ月連続で60万円を上回っている。

子牛価格は季節により波があるが、過去5年では21年4月に80万円台をつけたのがピークでその後は下落傾向が続いてきた。6月の価格としては65万円だった22年に迫る水準だ。

ところが、和牛の食肉の需要を見ると足元では低調だ。東京市場での6月のA5等級枝肉の卸値（去勢の加重平均）は16～18年に1キログラムあたり2800円前後とピークをつけたが、25年は前年比横ばいの2400円台と低迷が続く。物価高にあえぐ消費者の間ではより安価な交雑牛や乳牛、豚、鶏を選ぶ傾向が強まっている。

なぜ和牛需要が低迷しているのに子牛の価格が高いか。肉牛の生産工程を見てみよう。繁殖と肥育を異なる農家が手がけることが多い。和牛の場合、市場で競りにかけられた子牛が繁殖農家のもとで成長して出荷されるまでの期間は20カ月前後とされる。肥育農家にとって子牛市場は約1年半後を見据えた先行投資の場となる。

枝肉相場と相反する値動きの背景には子牛が減りすぎることへの警戒感がある。公益社団法人の全国和牛登録協会（京都市）によると24年度の子牛登記頭数は23年度比で3％減り、25年度も微減が見込まれる。

飼料価格の高騰などで収益性が悪化した繁殖農家の離農や規模縮小が増え、子牛の登記が減った。牛肉需要の低下を上回るペースで供給が減るのではとの危機感が肥育農家の間で高まった。それが需要低迷下の子牛の買いへとつながったというわけだ。

子牛の今後の価格動向は引き続き高値で推移しそうだ。東日本有数の取引規模を持つ矢板家畜市場（栃木県矢板市）で1～2日に開かれた競りでの平均価格は前月比4％安の65万円だったが、前年同月比では依然2割ほどの高値にとどまった。去勢牛が前月比6％安となった一方、繁殖の用途もあるメスは前月とほぼ同水準だった。

枝肉相場は牛肉消費の増える年末年始がピークとなるため、子牛価格は20カ月の生育期間を逆算して例年春に高騰する傾向がある。足元の枝肉相場の冷え込みもあり過熱は一段落したとの見方もあるが、JA全農とちぎ畜産生産課の担当者は「春先ほどの逼迫感はないものの、当面不足感は続くのではないか」とみる。

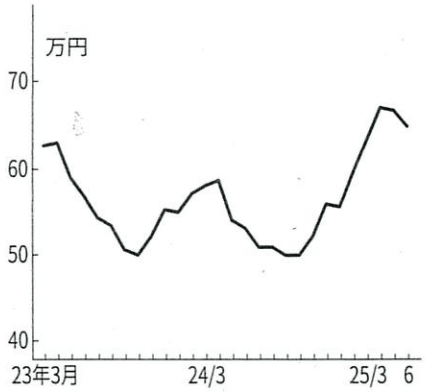
繁殖農家側も経営環境は厳しい。農林水産省によると肉用子牛の全算入生産費は飼料価格の高騰などにより10年間で4割増え、23年は1頭あたり86万円に達した。経営難や高齢化で離農も相次いでいる。

和牛の繁殖・肥育を手がける森木畜産（宮崎県川南町）のオーナー、駒崎なつき氏は「機材やエネルギー代も上がっており、子牛が最低でも60万円以上で売れなければ経営規模を維持できない」と話す。

子牛の相場上昇を受け最終的に牛肉の価格は上がることになりそうだ。肥育農家は買った子牛が将来、枝肉として購入費用に60万円を上乗せした金額で売れるかどうかを取引の目安にしているとされる。現在70万円ほどで取引されている去勢牛で考えると枝肉重量は500キログラム前後となるため、子牛の20カ月後の枝肉相場は単純計算で1キログラムあたり2600円程度と足元より高い水準を想定していることになる。

和牛専門の食肉卸ニイチク（東京・江東）の植村光一郎取締役は「国内より高く売れる輸出拡大への期待もあり、枝肉相場が今よりも上がると見込む市場関係者は多い」と説明する。

黒毛和種の子牛価格の推移



（注）オス・メス合算の全市場平均価格
（出所）農畜産業振興機構

競り落とされた子牛を繁殖農家が出荷するのは20カ月ほど後だ（1日、矢板家畜市場で開かれた競り）